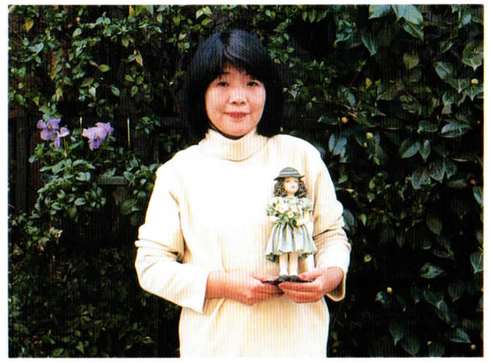
和光市女性情報紙　第2号

「アートフラワー」
作：和光市在住　花岡 里恵子
アートフラワー研究会主宰

表紙のことば



アートフラワー研究会

主宰　花岡　里恵子　さん

表紙の写真、生花のようですが、実は違うんです。花びらや、葉の形に切った白布を、染料でひとつひとつ染めてはり合わせたもの。

花岡さんは、このようにして作ったアートフラワーやセラミカル人形、アクセサリー作りの会を主宰して22年。会員数は24名です。

「花がすき　人がすき」を合言葉に日々世界中にただ一つの個性豊かな作品づくりに取り組んでいます。

毎年、和光市民まつりに出展。

花がすき　人がすき

編集後記

妻ではなく、母ではなく、「私」自身が考え、行動した一年でした。私の中に育ったジェンダーフリーという意識を周囲に伝え、広げていけたらいいな。　（千）

結婚して35年、生命の底で眠っていた自分が揺り起され、今まで目にも飛び込んでこなかった文字に魅せられ、学んだ、思いがけない日々でした。　（S）

考え方や行動が自分では最先端を行くと自負していましたが、「おるご～る」の編集を通して意識改革の必要は自らであることに気付き勉強になった一年間でした。　（N）

歳をとるってどんなこと？と、これからの生き方を考えるために「高齢者の脳の働き」という講座を受けています。脳の神経細胞が死んでいく音が聞こえてきます。　（希）

次期推進委員募集

女性問題専門のアドバイザーとともに次号の情報紙の企画編集をしたり、女性の地位向上の推進に一役買いたいという方を募集します。

募集人員：若干名
期　　間：平成９年５月１日～平成10年３月31日
会　　議：月２回位
謝　　礼：薄謝
応募方法：400字詰め原稿用紙2枚以内に応募の動機をお書きの上、４月22日（火）までに企画課に提出してください。

※詳しくは企画課文化女性係へ

発行日　1997年２月28日
編　集　和光市女性問題行動計画推進委員
浅川千代子・根岸 彩子・吉岡 定子
女性問題アドバイザー　横井希代子
発　行　和光市企画部企画課文化女性係
〒351-01 和光市広沢１番５号
TEL（048）464-1111 内線 2328

※この情報紙は再生紙を使用しています。

書くことで自己表現

中沢けいさん

和光市在住の作家・中沢けいさんに、ご活躍中の仕事のことや市民の立場としてのことなど、多岐にわたるお話を伺いました。

○作家になった動機をお聞かせください

作家というのは、自分がなろうと思えばいつでもなれますが、周りが認めてくれなければ駄目なものです。

私の場合は、大学一年の時に初めて書いたもので賞を取り評価していただけましたので、知らないうちに作家になっていたというわけです。

○若い時に賞を取ったということでご苦労がありましたか

私自身はあまり苦労はなかったですね。新しい書き手として登場したときに、周りを気にして右往左往するようだと駄目ですね。ですから書評や批評はあまり読まないようにして、マイペースでやっていました。

○作家の世界で男女差別を感じたことはありますか

日本はものを書く女性というのが、諸外国に比べて違和感の少ない国ですね。

私のデビューは一九七八年ですが、ウーマンリブがフェミニズムに入れ替わっていく時期だったんですね。ずいぶん女性と文学の講座などの講師のお話をいただいたから、男の人より逆に時代の潮流に乗って得をしたかもしれません。

○子育ての中で「男の子だから…」とか、「女の子らしく…」とか考えたでしょうか

私のところは上が男で下が女ですけど、上の子は色白で優しい顔なんです。下の娘はちょっと活発で、逆なんじゃないかって言われてます。

自分の才能に自信が持てるっていうのは、個性を持つ第一歩ですね。そして、自分自身の個性に自信が持てれば、男でも女でもいいじゃないかっていうんです。でも、今の世の中、女の子だけどこんなにできてすごいとか、これからの女の子だから、ガンバレ、ガンバレって言われて女の子はすごく元気なんですけど、逆に男の子は、自分が男だということに自信を持てるシーンがすごく少ないんです。

○市の行政に対してご意見がありますか

隣接の区市との連携っていうのは昔に比べるとずいぶんよくなりましたよね。練馬区の区立図書館なども、利用できますし。でも、和光市にもう少しいい図書館が欲しいですね。もしくは図書館はあのままでも、どこの図書館には何の本があるって、検索できるようなシステムと専門の司書を置ければ、よそから借りてきて対処できますよね。

○お子さんを保育園に預けられたそうですが、保育行政についてはどうですか

お世話になった保育園にはとても感謝しています。でも、どうしても東京都と比べてしまう。施設や内容など、隣接の市でこんなに違うのはちょっとどうかなと思います。

これから高齢社会になるので、労働人口が減るし、基本的には女性が職場に出てくれないと困る時代ですね。女性のためだけでなく、社会のために基盤整備をしていく必要がありますね。

○選択的夫婦別姓制度についてどのような考えをお持ちですか

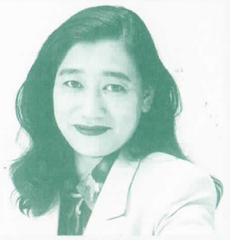
基本的には賛成です。別姓を選択したい人が選択できるのは良いことです。机の上でああでもないこうでもないって言っているよりは、皆でやってみるとだんだんいいやり方って出てくるんですね。

家庭がこわれると心配する人がいますが、そんなことはないと思います。それぞれ個人の事情に応じて選択すればいいと思います。

アジアの国の中には儒教の祖先崇拝の伝統から夫婦別姓の国もあります。保守的な意味の夫婦別姓です。祖先を崇拝して子孫を大事にするというところに儒教の宗教性がありますから、東洋人の姓名には宗教的な背景があるということも知っておくといいですね。

一方日本では、みんなが姓名を名乗れるようになったのは明治3年からです。まだ歴史が浅いんです。その前はもっと名乗りの自由がありました。秀吉もずいぶん名前を替えましたけど、そういう時代のことを思い出してもいいかもしれません。

96年11月13日　インタビュー
〈中央公民館にて〉



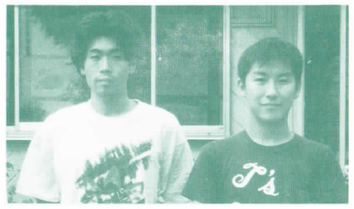
1978年「海を感じる時」で第21回群像新人賞受賞。
1985年「水平線上にて」で第7回野間文芸新人賞受賞
1995年から群像新人賞選考委員
現代人の精神風景を如実に捉え、通俗趣味とは一線を画する作風で現代文学の最も先鋭な一端を担っている。

共生の社会～生き方わたし流～

保父さんにエール！

船本さんと桜井さんは和光市の保育園で働いている保父さんです。和光市の五つの市立保育園には403人の園児が通っています。臨時とパートを含む保母さんの94人に対して、保父さんは三人だけ。保母さんだけの園では、保父さんの存在すら知らない子供たちもいます。

「保父は生涯の仕事」と語る若いお二人、「男の人がなんで？」と思われたあなたもぜひはご一読を。



船本　勉　さん　23歳

もともと子どもが好きで、漠然と幼児に関わる仕事がしたいと思っていた。高校生の時、保育園でボランティア活動に参加し、挑戦してみたいなァと思っていた。

櫻井　哲　さん　23歳

尊敬していた先輩が、幼児教育の道に進んだことで影響を受けた。自我が芽生える前の幼児の成長過程が知りたくて、この仕事を選んだ。

苦もあり楽しみもあり

女性ばかりの職場でさぞかし不便なことが多いのではと思いきや、男性の職場だから、女性の職場だからという意識はないそうです。

「自然体でやっています」とあっさり答えが返ってきました。そんな二人も子供のこととなると話が尽きません。

「楽しいんですよ。苦しいこともあるけれど、楽しんでやれる仕事は、そう多くはないと思うんです」と、子供たちと一緒にいることが楽しくて仕方がない様子。きっとかかわった分だけ素直に反応を返してくれる子供たちが、日々の苦労さえもささいなことのように思わせてくれるのでしょう。

保育は自分そだて

子供が好きで好きで仕方のないお二人ですが、それだけで勤まる仕事ではありません。一つの命を預かるのですから責任は重大。そこにはプロとしての姿勢が伺えます。

大きな体が子供たちを威圧しないよう腰をかがめ、子供と目線をそろえる。そして遊んであげるのではなく、一緒になって遊ぶことを心掛けているとか。言葉も幼児言葉は使わず、一個の人格として対等に付き合っていくことが大切なのだと話してくれました。

「自分自身が成長していかなければ、子供と真っ正面から向かい合うことはできませんね」と、少し照れた様子で一つ一つ言葉を選びながら語ってくれる姿に、どれだけ子供たちといちずに付き合っているかが伺えます。

男だって子育てしたい

男性だけで社会を支えきれないように、家庭や育児も女性だけでは支えきれないもの。

「男性と女性を比べたときの大きな違いは、子供を産めるか、乳をあげられるかくらいで、男でも育てることができる。母乳では育てられないけれどミルクで育てられる」という言葉に「そうなんですよ」と思わず相づちを打ってしまいました。

出勤前のあわただしい時に、子供の昼寝用のシーツを取り替えているお父さんの姿を見ると「自分たちも頑張らなきゃいけないな」と励まされるそうです。

僕たちをもっと見てほしい

一九七七年の法改正によって、男性が保育にあたることが認められてから20年が経ちますが、保父さんの数は横這い状態のまま。まだまだ男性の入っていきづらい職場のように思われているようです。

そんな状況の中では、やはり横のつながりが大切になってきます。お二人も県内の男性保育者の集まる「男保連」という組織を通じて、他市の保父さんとの交流や情報交換は欠かさないそうです。

世の中が女性と男性の二つの性で支えられている以上、子供たちを取り巻く環境も二つの性によって支えられている方が自然です。

「家庭にお父さんとお母さんがいるように、保育園にも女の人だけでなく男の人も必要」と言うお二人。

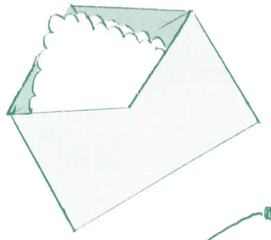
これほど男性を必要としている職場は他にはないかもしれません。子供たち自身も必要としているのですから。

96年8月5日　インタビュー
〈第一保育園にて〉

ほっとニュース…今まで第一保育園で臨時職員として働いていた櫻井さんが、4月から正規職員として採用される予定

あなたの場合 わたしの場合

選択的 夫婦別姓 制度



～市民の声～

「僕は変えてみたかった」

私は人の姓名にはあまりこだわらない方である。結婚するときどちらの姓にするか結婚相手と協議することとなった。相手は今までの姓に愛着があるし、姓が変わってしまうのは寂しい、ということであった。私の方は日本中どこにでもある姓なので変わってもよいと思い、それではジャンケンで決めようとなり、その結果、私が負け相手の姓とすることと決心した。そのことを親戚に告げたのであるが、「婿に行くのならまだしも、そんなこととんでもない。」ということとなった。

そのとき、姓を変えるというのは大変なことなんだなと思った。しかしこれは男の場合であり、女の場合は「変える事」は当たり前のことなのである。

これが日本の常識であり、男中心の家制度を形成していく典型的な証拠ともいえるのである。

姓は家族単位で決められている方が、行政サイドから言わせると何かと便利である。しかしそれは人権を優先にした考え方とは言えないのであろう。

夫婦別姓の主張には、いまだに残存している日本の封建的な家制度を改革し、生活の基盤から真の男女同権を確立することにあると思う。

夫婦が合意して、それぞれの姓を名乗る、そういう選択もあってよいのではと考える一人である。

前述した私の姓の事であるが、親戚とトラブルまで起こして姓を変えることもないだろうと思い、まだ日本に圧倒的に多い姓を名乗っている私である。

20数年前その当時、そう重要なこととととらえてなかったが、今思うと重要な課題であったのだ。

（50代　男性）

「ユーミンに教えられたこと」

「結婚しました。」の挨拶状、左の脇に小さくカッコ書きされる（旧姓〇〇）は、多くの文字の中で一番自己主張しているかのように目をひくのは、新しい私が生まれたアピールのためか、昔の私を忘れないでという最後のあがきのためだろうか。

その昔、日本中の若者の心をつかんだシンガーソングライター荒井由実は、結婚によりすんなりと松任谷由実になり、ファンをアッと驚かせた。惜し気もなく夫の姓に従った大胆さの裏には、結婚により昔の自分が消滅されるかのようなマイナス志向はみじんもなくむしろ、昔の自分という土台の上に新たな自分を築いていくのだという意欲的とさえ思われるプラス志向がはっきりと伺え、私自身の結婚に対する概念が大きく変わったものだ。

結婚により姓がかわる事、それは時代の変遷。それが女でも男でも自分の歴史の中の事実として受けとめ、各々の時代の中に生きる自分を大切にする事が肝要と私は考える。

（30代　女性）

インタビューで一言　…10月　中央公民館にて

自分の身の上に置き換えてみると必要のないことですが、結婚によって姓が変わることに困っている人もいると思います。

（42歳　女性）

世間一般には別姓が認められる時代になっていますね。結婚によって姓がゼロになることは淋しいと感じる人もいるでしょうし、逆に姓を変えたい人もいるでしょう。

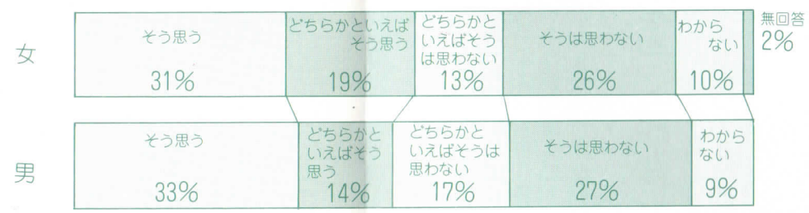
姓の問題の前に家族のあり方や家があるのではないですか。我々の時代は家というものを大事にしてきたからね。

（54歳　男性）

女性が仕事をする上で便利性はあるでしょうが、家族制度が崩れるような気がする。基本的に別姓を法制化することは反対です。何も法制化する必要はないのでは。仕事上で別姓の人はそれなりにやっていることですから。

（43歳　男性）

別姓か同姓かを選択できる方が良いと思いますか



※このグラフは、平成８年10月に市民1,600人を対象（回答者数658人）に実施した「和光市女性問題に関する意識調査」結果から抜粋したものです。

「夫の二言」

夫婦別姓をどう思うか、夫に聞いてみた。第一にやはり、子供の姓がどうなるかが心配だ。第二に価値ある名前（例えば仕事を持っているとか）の場合だと言った。

それを聞いて、まず第一については、私も心配な点はあるが、夫婦で話し合ってどちらかに姓を統一すれば良いと思うし、現在はまだ夫婦別姓が少ないから、子供もとまどうかもしれないが、慣用化されれば当たり前の事になっていくと思うので、さほど心配しなくてもよいと思う。

次に第二については、やはりこの言葉に男女差別の原点があるように思われる。結婚したんだからと言われればまだしも、嫁にもらったんだから、名前が変わって当たり前などという言い方をされれば、物じゃあるまいし、やったもらったもないわ、と思っている私は尚更である。

以上のことから、私は夫婦別姓には賛成である。しかし夫の第二の言葉にムーッとしながらも、自分でさえも、同じように思ってしまうところに否めないものを感じる。

（30代　女性）

「わたしは賛成ですよ！」

日頃お世話になるタクシーのおじちゃん、短い距離だけど思いきって夫婦別姓について聞いてみた。

「私は賛成ですよ！」年齢は50代。

意外、意外「どうでもいいでしょう、私らには関係のないことだから」という答えがかえってくると思ったから。

「案外、新しいんだ」と私。

「いや、いま結婚を考えていて、その人、中学生の子どもがいてね、子供の姓のことでなかなか進まないんだ。だからこの法案が通るの俺、待っているんだ」

朝から「ごちそうさま」という気持ちと、この問題を真剣に考え、必要としている人が現実にいるのだと、あらためて認識する私。

今、この法案を55％の人が容認していると聞く。夫婦同姓を何も考えずに生きてきた私にとって、日常茶飯事に聞く離婚の話。

「子供さんが可哀想ね」と思う前に、「子供の心がキズつかなければいいなァ」と思ったりもする。別姓であれ、同姓であれ、親子はどこまでいっても親と子。

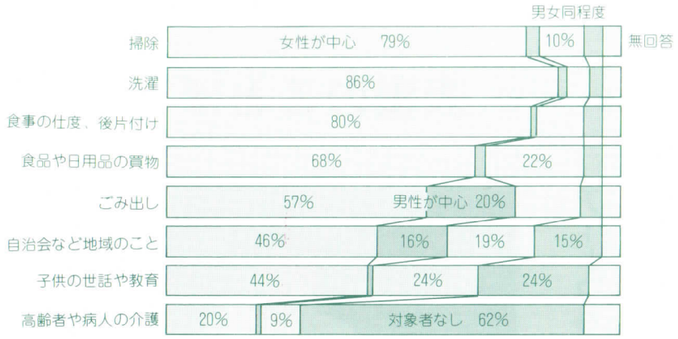
あのおじちゃん、その後どうしたかなと思っていたら、また同乗のチャンス。遠慮がちに「その後は？」と聞く私に「やっぱり財産とかいうのむずかしくて、うまくいかないよ」と沈んだ声。姓だけではどうにもならないのだな。

（50代　女性）

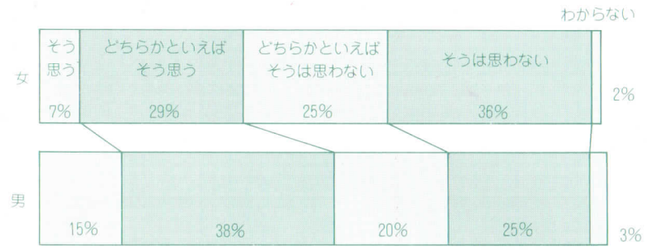
女性問題に関する 意識調査 結果報告

※　これは平成８年10月に市民1,600人を対象(回答者数658人)に実施した「和光市女性問題に関する意識調査」結果から抜粋したものです。

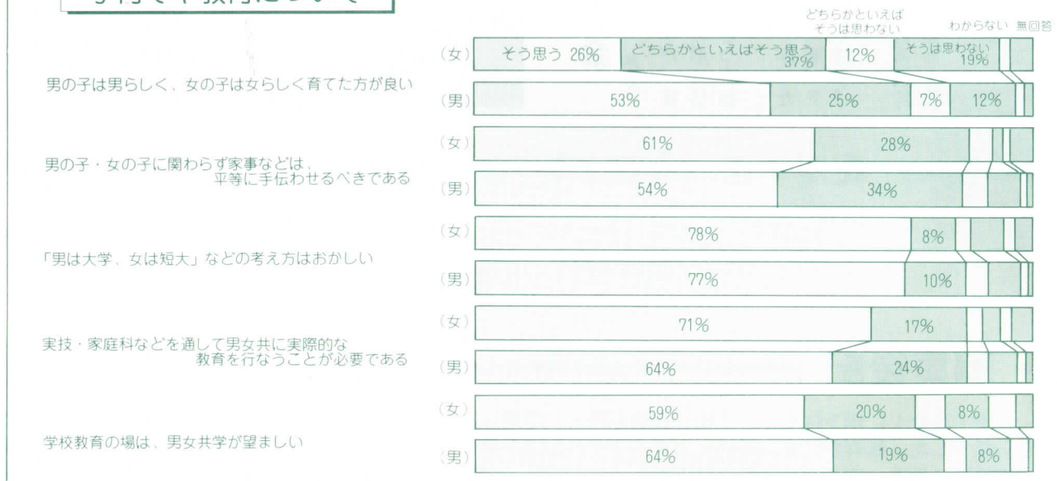
家庭での役割



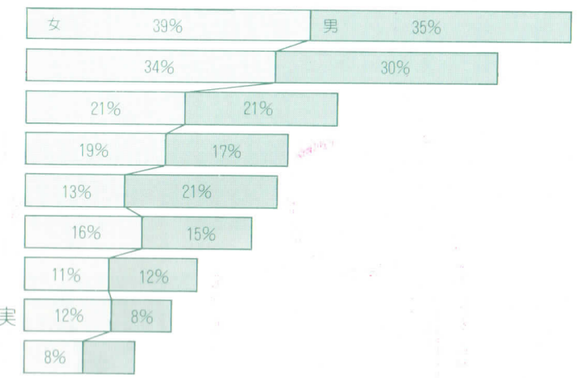
「男は仕事、女は家庭」という考え方について



子育てや教育について

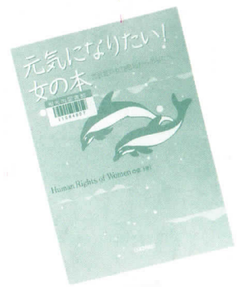


「男女共同参画社会の実現」のため、市は何に力を入れるべきか(上位9まで)



「育児で会社を休むような男たち」
(ユック舎)
男も女も育児時間を！連絡会 編

育児時間や育児休業を取って、育児と仕事を両立させてきた働き盛りの四人のサラリーマンが、喜び、グチ、葛藤などを本音で語る



「元気になりたい！女の本」
～北京世界女性会議からあなたへ～
(日本評論社)
ヒューマンライツオブウィメンの会 著

世界の女性たちの悩みを知り、日本における女性の問題の現状をわかりやすく解説。未来を変えるのはあなた自身！

「みんな年をとる」
―老齢化社会をいきる知恵―
(PHP研究者)
邱永漢 著

自分の老人としての体験を通して、新たな発見と驚きを語り、好奇心を持っていれば老いても、決して退屈はしないと言い切っている

「定年からの家族元年」
(文芸春秋社)
加藤 仁 著

長くなった老後、第二、第三の人生の花を咲かせた人たちの、いろいろなケースが紹介されている。読むと元気が出る一冊